



DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siegf : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 33

juillet

1995

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

1995年度 総会とパリ祭

M.ワッセルマン博士が記念講演

三重日仏協会1995年度定期総会は、7月9日津市のレストラン東洋軒で開催され、1994年度事業報告と会計報告（一般および特別）、役員選出、1995年度事業計画と予算計画を、いずれも理事会原案どおり決定いたしました。

このうち昨年の「まつり博」ともなう〈ルウ・クラブ・ドゥ・セミセンス〉招請事業特別会計では、各方面からのご援助と、同舞踊団の日本滞在が予定より一泊少なくなったこともあって、若干の剰余金を生じたことが報告され、これは今後の日仏交流事業に備えて、特別会計剰余金のまま据え置くことといたしました。

また役員選出については、陰里鉄郎理事、宮崎由至理事がご退任、新しく宮崎真知、ジャン＝フランソワ・ダメモ両氏が理事に就任されました。（その他の役員は留任）。総会議事についての詳細は、議案書をご覧ください。（総会ご欠席者には郵送いたしました）

総会に先立っておこなわれた記念講演では、立命館大学国際関係学部教授で前・関西日仏学館館長のミシェル・ワッセルマン博士が、長年のご研究テーマである歌舞伎など日本演劇と、ご自身との関わりについて、流暢な日本語で話され、感銘を与えました。ご講演の要旨は2～3面に掲載いたします。

終了後、恒例の「パリ祭」パーティーが開かれ、ワインのきき当てクイズや「パン作りの材料当てビンゴ」などユニークなゲームで楽しいひとときを過ごしました。

なお今年は、シラク新政権の「核実験再開宣言」に抗議して総会行事を欠席するという会員もあり、問題の深刻さを物語っています。

事務局からのお願い

- 今年度会費、まだの方はお早めをお願いします。振込用紙を同封いたしました。年会費は3,000円です。
- 新しい会員名簿を作成しますので、ご住所その他の事項に変更のある方は、事務局までお知らせください。

7月9日総会での Michel WASSERMAN ミシェル・ワッセルマン氏の記念講演の要旨をご紹介します。
当日のメモを頼りにしたもので不正確な点があるかもしれません。お許しください。(文責・井土)

鳴神の寺

—あるフランス人と日本の伝統文化—

演劇・音楽に夢中だった青春時代

少年時代、私にとって日本は遠い国でした。黒澤や溝口の「時代劇」映画を観るくらいで。そのころから演劇と音楽には非常に興味があり、修士論文もモリエールとリュリが組んで創った音楽劇についての研究でした。二十歳のころ、アメリカのプリンストンに約一年間学びましたが、ここはキャンパスに劇場があって、毎水曜日、低料金でよい音楽や演劇が上演され、よく通ったものです。ヘフリガーやジャネット・ベーカー、マルチノン指揮の仏国立管弦楽団のメシアン演奏もここで聞いて感動したことを思い出します。

私の人生を変えた能「船弁慶」

ある日、ここで〈NO theatre from Japan〉というポスターを見つけ、観にいきました。演目は狂言の「棒しばり」と能の「船弁慶」でした。まず「棒しばり」を観て、遠い国の遠い時代の芸術に驚き、おおいに興味をそそりましたが、これはヨーロッパの伝統芸術と共通したものが感じられました。私の人生をいわばドンデン返しにしたのは、次の「船弁慶」でした。あのとき、これを観ていなかったら私の人生は別のものとなり、今日ここで皆さんと会うこともなかったでしょう。まずはじめの鳴り物とかけ声のところで、なにかプリミティブで動物的なものを感じ心をゆさぶられました。この日本の中世の芸術には、音楽・演劇・舞踊の完全な混合があり、かつて経験したことのないものでした。というも、近世ヨーロッパでは音楽劇、せりふ芝居、舞踊などがそれぞれ王の許可をもらって別々に上演され、融合することができなかった。言わば法的な制約があり、やっと19世紀後半、ワーグナーによって融合がはかられたという事情があるのです。

歌舞伎のバリ公演に全力投球

こうして日本の演劇に魅せられた私は、国立東洋言語文化学院で日本語の勉強を始め、ここで出会った早川先生から歌舞伎について教えられました。

1974年、東京外大に赴

任してからは、歌舞伎に夢中で毎日のようにあちこちの劇場をハシ

ゴして、「顔パス」になったほどでした。博士号も、パリⅢ大学で歌舞伎についての研究で取得、二年間帰国したあと1981年再び日本に来て、86年には京都日仏学館に赴任しましたが、このとき孝夫、玉三郎ら歌舞伎のバリ公演があり、そのお手伝いの仕事がまわってきました。だしものは歌舞伎十八番「鳴神」と舞踊の「累(かさね)」で、この二つに私はまたのめりこんだのです。すばらしい体験でした。

あつた！「鳴神の寺」

1988年2月の休日、ひとり鞍馬をめざして京都郊外をドライブしていて道に迷い、雲ヶ畑という寒村に入り込んでしまいました。そこに志明院(しみょういん)という山寺がありました。門前の案内看板を見て驚きました。因縁話めきますが、そこが「鳴神」の題材となったお寺だったのです。石段を登っていきました。芝居の舞台では、滝と洞穴と鳴神上人のお堂が水平に配置されていますが、この寺はそれらが垂直に並んでいます。18世紀後半、この芝居をつくった二代目市川團十郎が、江戸からこの地を訪れて舞台をデザインしたのです。感動した私は住職を訪ね、それ以来親しくなりました。真言宗のりっぱなお坊さんですが、夫妻とも自然保護に熱心で、音楽が大好きです。毎年五月にはこの志明院で、京都の一流奏者による「しゃくなげコンサート」が開かれています。すばらしい自然のなかで、ネコや小鳥も聴きに来るのです。(もっともこのネコは、モーツァルトは丸くなって聴き入ってましたが、ドビュシーやミヨーなどあたらしい音楽が始まると、必ず退席するのです)。

皆さんも、ぜひ志明院に一度出かけて見てください。



六角形の言葉

Lyon大学に東洋語学の講座をもつ Jean CHOLLEY先生は、東洋語のみならず多数国の言語に精通する碩学である。70年代半ば、先生が愛知県立大学で教鞭をとっておられたころ、日本のあるフランス語学習雑誌に一文を寄せられたことがある。題して「六角形の言葉」。

フランス有名新聞の政治記事の一部を引用し、その文章が記者の言わんとするはずのこととは正反対の意味に読めてしまうことを挙げ「……記者はフランス語でなくて hexagonal という奇妙な新しい言葉を使っているからである。フランス国土が大体において六角形(hexagone)の形をしているので、十年程前からフランスの言語生活のあらゆる方面に触手を伸ばしている醜い蛸のような新しいフランス語に hexagonal という名がついた。……」と解説する。そして、その因って来るべき所以と意義とを延べ、フランス語の将来を憂慮するところには「……フランスの学生が国語の時間に Français-Hexagonal 辞書と首っぴきでガムーやマルローなどの小説の翻訳に取り組んでいることになろうが、それを想像するとぞっとする。……」と書いている。この点は日本語の現在・将来も同様かな？ と私は思った。Hexagonalや、その背景としてのフランス社会を罵倒し揶揄するくだりは痛快で、通読希望者があれば全文のコピーを提供したいと思う。

数年前 Cholley 先生に手紙を出したとき、偶々フランスの専門誌に書いた小論説があったのでコピーを同封し「これは français か hexagonal か？」と質問した。先生からは近況を知らせる詳しい返信をいただいたが、この質問にはまったく触れられなかった。それで、私の文章が français にも hexagonal にもなっていないメチャクチャ語であることがわかった。(ours)

第1回ワインアドバイザー全国選手権大会

本会メンバーから 1位 長田さん 2位 杉本さん

去る五月、権威ある「世界最優秀ソムリエコンクール」が東京で開かれ、日本人が初めて優勝して話題となりましたが、これに伴うイベントとして第一回ワインアドバイザー全国選手権大会が同じ会場で開催されました。コンクールでは書類審査、口頭試問、きき酒の三次にわたるテストでしぼりこまれた6人が、ステージでの公開審査にのぞみました。この6人のなかには、全国の大手ワインディーラーに混じって、三重日仏協会の二人のメンバー長田康二さんと杉本静彦さん（いずれも酒店経営）が残りましたが、きわめて難度の高い審査の結果、なんと長田さんが優勝、杉本さんが準優勝に輝きました。



表彰式での
長田さん（中央）杉本さん（右）

以下、長田さんとの一問一答；

おめでとうございます。ご感想は？

—めっちゃ嬉しい！一番好きな世界で、第一回に日本一になれて。あこがれの田崎さんもソムリエの方で世界一だし。三重日仏のすばらしい皆さんの励ましを心の支えにしてがんばりました。

天性の才能？あるいは勉強、努力？ コツは？

—あるところまでは書物などで向上できるが、それを実際に生かすセンスが大切だと思います。とくにコンクールはその勝負。物事を素直にみる態度と、dégustation（きき酒）は好みに流されないこと。生意気なようですが。

今後の目標は？

—SOPEXA（フランス食品振興会）主催の、年一度のソムリエコンクールで優勝すること。

※ワインに関して、ソムリエは主にレストランで客に適切な助言をするのに対し、ワインアドバイザーは主に販売の際に適切な助言をします。

★フランスミニミニ情報★

コンパニオン・アニマルの増えすぎ

フランスには犬や猫、小鳥、魚などのいわゆるコンパニオン・アニマルが4,200万、つまり人口1人あたりではアメリカ、アイルランド、ベルギーとならんで世界で最大の数がいるといわれている。ところがこうした「ペット過剰」状態がもたらす様々な問題について、これまで政府や自治体当局が基本的には無策のままであった、とする報告書が最近、パリ市議会議員で国立獣医師学校に所属する研究者でもあるジャン＝ミシェル・ミショー氏によって発表された。それによると、現在ではフランスの家庭の2軒に1軒はペットを飼っており、ペットに関係する展示会や展覧会は年に2,000を数え、ペットに結びつく経済活動はルノー社の売上に匹敵する水準に達しているのに、ペットの無制限な繁殖とか、ペット飼育者やあるいはペット業者のモラルなどについて、まったく規制が行なわれていない。そのために、犬の鳴き声による騒音とか、フンなどの公害（パリ市では歩道に放置されたフンの処理だけで年に4,000万フランをかけている）はますますひどくなり、素人ブリーダーによる無秩序な取り引きが広がり、犬の盗難が増え、迷子犬の数は年に50万に達するなど、多くの問題がうまれている。こうした現状に対して、ミショー氏はコンパニオン・アニマルが人間のために果たしている役割を強調しながらも、その数が際限なく増えることを防ぐ必要を説き、さらにペット商売を専門職として認めて、それに適した人材を養成するよう求めている。また国勢調査に際してはペットの有無に関する質問項目を設けるよう提唱しているが、ペット税を創設することには反対している。